

眼底検査が心臓血管病の発症リスクの予測に有用～吹田研究

地域住民を対象に、軽度の高血圧性網膜症と心臓血管病の発症リスクとの関係について検討した。

大阪府吹田市の住民で、登録時に循環器疾患の既往のなかった30～79歳の7,027例を対象に高血圧性網膜症について検査し、診断を行った。中央値で17年間の追跡期間中に531例が脳卒中、247例が虚血性心疾患を発症した。性別や年齢、血圧値、コレステロール値、服用薬などの心臓血管病のリスク因子で調整して解析した結果、正常群と比べた軽度高血圧性網膜症群の心臓血管病の発症リスク（ハザード比1.24、 $P<0.05$ ）および脳卒中の発症リスク（ハザード比1.28、 $P<0.05$ ）に有意な関連がみられた。一方、冠状動脈性心疾患の発症リスクとは関連がみられなかった。眼底細動脈の狭細の有無や血柱反射について検討したところ、いずれも所見がある群で心臓血管病の発症リスクが高かった（ハザード比はそれぞれ1.24、1.33）。また、血圧が正常範囲内の場合でも、軽度高血圧性網膜症と診断された人では、網膜症のない人と比べて脳卒中発症リスクが高かった。

したがって、日本人において、軽度の高血圧性網膜症は心臓血管病および脳卒中の発症リスクと関連することが示された。心臓血管病の予防において、リスクの層別化を行うのに眼底検査が有用である可能性が示唆された。

出典：Journal of Atherosclerosis and Thrombosis. 2022 Jan 15 published online first.